エコール・ド・パリとアジア十選（5）

比較文化研究者　二村　淳子

グエン・ファン・チャン「オーアンクァン遊び」

グエン・ファン・チャンは東洋美術学堂（ボザール・ド・ランドシーヌ）の一期生だった。彼は東洋と西洋の画材を技術的に混淆して考案された新しい絹画「ベトナム絹画」の第一人者である。

ベトナムでは常に活躍していたファン・チャンだが、海外でも耳目を集め、コレクターを確保するようになったのは1930年代のパリでのことだった。この「オーアンクァン遊び」は31年のパリ植民地博覧会で批評家たちに絶賛され、彼の名を広く知らしめた。

作中の子供たちが興じている「オーアンクァン」とは、マンカラ（東南アジアからアフリカにかけて昔から遊ばれているボードゲーム）の一種だ。「キンマのお店、お香の遊ぶ習わしがあったという。描かれたのは、ちょうど、ベトナム知識人たちが民謡や童謡を収集・編集していた時期だ。おそらく彼は、ただ単に農村のワンシーンを描いたのではなく、ベトナムの文学の一底流としての童謡の存在にも関心を寄せていたに違いない。

書道を得意としていた彼は、墨汁で雅号「鴻南」とサインし、短い詩を添えることもあった。詩書画一致の境地を、ファン・チャンが理想としていたことがよくわかる。（1931年、水彩、絹、65・3×87・5㌢、福岡アジア美術館所蔵）

文化往来

黒澤満氏逝く　撮影所崩壊後を主導

映画プロデューサーの黒澤満氏が逝った。1970年代の日活ロマンポルノを撮影所長として支え、77年からは東映セントラルフィルム（現セントラル・アーツ）を率い、低予算映画を量産。VシネマやTVドラマも手がけて東映の屋台骨を支えた。撮影所システム崩壊後の日本映画を主導した人だ。

梅田日活劇場支配人から製作現場に転じたのち、後に独立系プロデューサーとして活躍する岡田裕、伊地智啓らを助監督から転身させた。「現場クール」「あぶない刑事」も生んだ。

低予算映画を手がけた人だが、古き良きハリウッド映画に造詣が深く「映画の基本が染みついていた」と伊地智氏。「（撮影所崩壊後の）日本映画の流れの中で絶妙の位置にいた人。彼が集める人の流れが自然にできた」と悼んだ。

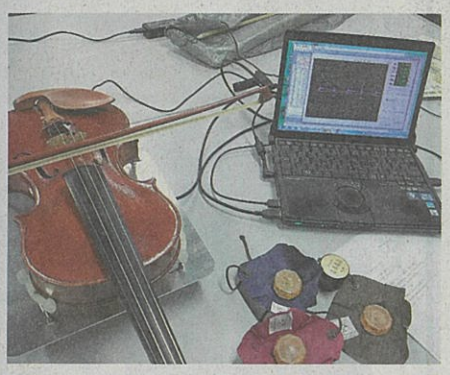
澤井信一郎、崔洋一、森田芳光ら新進監督を起用、90年代以降は三池崇史、行定勲らを育てた。人気シリーズ「ビー・バップ・ハイスクール」「あぶない刑事」も生んだ。

文化

理想の音色を科学する

◇バイオリンの名器の響きを解析　現代技術で再現めざす◇

横山　真男



バイオリンはストラディヴァリウスなど300年ほど前にイタリアで製作された楽器が最も価値があり、音質も響きも最上だと多くの方が思っている。実際、これらの名器は多くの奏者が愛用し、名声にふさわしい実績を積み上げてきた。

しかし、これらの楽器のどこが優れているのかという科学的な根拠はほとんどなく、職人や奏者の感覚に頼ってきた。私はそんなバイオリンの音色の秘密に科学で迫れないかと「良い音」を巡る思考や研究を10年以上続けてきた。

＃＃＃

テレビで高い関心

バイオリンの音色は、テレビのバラエティー番組で高額な名器と安価な品の聞き比べが人気コーナーになるなど一般の人にも関心が高いようだ。もっとも弦楽器が弾け、楽器の製作経験や音響工学などの科学的知識が総合的にある人は少ない。

私は2009年に大学院で工学の博士号を取得。明星大学の教員になった。しかし弦楽器の音響研究は研究者が少なく、発展途上の世界。できるのは1本でも多くのデータを取り、地道に分析することだと悟る。

そもそも音とは一言でいえば空気の圧力振動である。この圧力振動の源であるバイオリンの板の振動とその振動から放射される音場を特別なソフトを使って解析する。まず3次元（3D）スキャナーでバイオリンの形状を記録し、パソコンに取り込む。そして木材の硬さ、表板や裏板のアーチのふくらみなどの細かなデータを加えてシミュレーションする。

こうしてバイオリンの表板や裏板がどう振動するかを分析することで、弦楽器のアーチや板の厚みを0・1ミリ単位で調整し、理想の音に近づけようと日々探究するバイオリン製作家の役に立つと考えている。

＃＃＃

良い音で鳴る周波数

バイオリンが良い音で鳴るための目安の一つとして、バイオリンに振動を与えた時に生じる板の共鳴周波数（モード周波数）が挙げられる。これまでの研究結果からストラディヴァリウスなどの楽器の板は340ヘルツ前後で共鳴するように調性されるのがわかっている。

これまでに1700年代のオールド・イタリアンの楽器から現代の製作家の新作まで数十本の音を録音・解析してきたが、やはり「良い音」の楽器は大半がこの数値の近くに集中している。数値が高すぎても低すぎても「良い音」とは言えないのだ。ただ、音色に関してはやはり科学的に測るのは難しく、感覚に頼らざるを得ない面がある。

結局、何が違うと「良い音」になるのか。結論は出ていないが、木の材質（経年変化）に最も大きく左右されるのは間違いない。ストラディヴァリウスの時代、イタリア北部で採れたスプルース（松）などの適した素材があったからこそ、当時の楽器が名器とされるのだろうか。この素材と音響の関係はいまだに謎だが、研究者としては興味が尽きない。

私は5歳からバイオリンを始め、10歳でチェロを弾き始めた。大学ではオーケストラに所属し、プロの道も視野に入れていた。一方、理工学部で情報工学を専攻した。

大学院修了後は大手メーカーなどで情報技術（IT）関係の技術者として働いたが、音楽に関わる仕事がしたいと思っていた。そんな時、弦楽器専門店が弦楽器職人をやらないかと声をかけてくれ、2001年から店で修業を始めた。充実の日々だったが、今から職人の技を極めるのは厳しいと考え、独自の音楽の道を思案した。それが「音楽と科学の融合」だ。

＃＃＃

クレモナの博物館駐在

今年11月、東京・本郷で開催された日本音響学会で、私はイタリアの弦楽器製作の聖地クレモナにおける音響研究の実情を話した。4月からミラノ工科大学の特別研究員として、クレモナのバイオリン博物館に駐在している。同大学は欧州屈指の名門。オペラ発祥の国らしく弦楽器の音響研究にも取り組んでおり、私には絶好の環境だ。

クレモナで音響研究の話をすると「バイオリンの音は科学では分からない」とけげんな顔をする職人や奏者も多いが、製作・演奏に関する科学的な指針と裏付けを見つけ、製作の現場に生かすのが私の仕事だ。良い音とは何か。この難しい問いに科学を通じて向き合いたい。（よこやま・まさお＝明星大准教授）

生かし切る　岩村　暢子

曹洞宗の大本山、永平寺の小林昌道監院が私を初めて訪ねてきたのは何年も前のことだ。高僧というのに簡易な僧服姿でひょうひょうと現れたのが印象に残っている。

小林さんの来意は講演の依頼だった。永平寺では食事の支度や食べること自体が大切な修行の一つなのだといい、日本人の食生活について語ってほしいと頼まれた。

数カ月後、私は永平寺近くの立派なホールに立っていた。講演会場の設営の様子をぼんやり眺めていると、小林さんが近づいてきて言った。「岩村さん、自殺はいけません。仏教で自殺は他殺よりもいけません」。いきなり恐ろしいことを言われて戸惑う私に、小林さんは続けた。「その委員会が2、3年かかるとしても、その間に地球環境は悪化する。その委員会はそんな状況をふまえ、その資源・環境の有限性を強く意識して議論してほしいと思っています。」

マタケル（103）

池澤　夏樹
鴻池　朋子　画

暗殺と求婚　23

「老人の自慢と思って聞いているか？」とタケノウチ（建内）がいきなり言った。「それも死んで久しい者の」

図星だったので焦った。

「いえ、そのようなことは」、と返すのが精一杯。

「吾ら葛城氏はそのまま半島の伽耶の王族に繋がっている。だからこそ吾の子のソツヒコ（襲津彦）は何度となく海を越えて彼方と此方を行き来し、双方の友好を図ろうとした」

「その方の名は聞いたことがあります。新羅を討ちに行ったのに、新羅王が美しい女を二人も送ってきたので嬉しくなって新羅側についたとか」

「そう聞いているのか」

「そしてこの国とは同盟の仲である伽耶を攻めたとも」

「やれやれ。それはまるで違う。葛城一統は伽耶の王族であった。その上でここ倭の大王とも親しい間柄だった。伽耶の王族の中で内紛があって、反攻を企てた者が百済に逃げてソツヒコのことを悪しく言った」

「それが二人の美しい女ですか」

「そうだ。その裏には倭を百済ではなく新羅に近づけようというソツヒコの意向があった」